



仲野誠さん—高田利雄氏撮影

しながら、仲野誠さん
(20)が笑った。

関東平野のほぼ中央に
林に囲まれた原野の産地
で、大きな産地がまわりの
上で並立っている。みぞ
造りのために大豆をもち
間かけて運込む。「放っ
ておくと、豆が釜の様に
へばりつくんですよ」。
調気の中でひしゃくを回

根をおろす

会社組織で米や野菜を
生産し販売する「森フア
ームサービス」。仲野さ
んは、そこで月給をもら
って働く「庶民サラリー
マン」だ。中堅社員とし
て農作業から機械の整
備、社員旅行の企画まで

オフィスは水田 ①

サラリーマンと手ばないで

こなす。そんな仲野さん
も、以前はスーツ姿で重
京のオフィスビルに勤め
るサラリーマンというあこ
がれを実現させるまで、
曲折を重ねた。

「何を考えたいという気
持ちはあったが、拙力で
飛び込むほどの自信もな
い。高校を卒業して浪人
したが、行きたい大学が
見つからず、受験もしな
かった。

千原照陽盛田でサラリ
ーマン家庭の長男として
育った。小学生のころか
ら夏休みにになると、両親
と一緒に大分県津町の
母親の実家に行き、農作
業を手伝った。「畑を覗
き回っていた。農業への
関心は、このころ芽生え

「生き方決めきれず」

「何を考えたい
か」。両親の叱咤
を受けるように大分の祖父
の家に転がり込んだ。
「農業につながる何かを
見つけたい」と、無料で
け回っていた。農業への
関心は、このころ芽生え

の進むべき道も見つけら
れない。結局千葉の実家
に戻って、東京都内の事
務機関販売会社に就職し
た。仕事はセールの朝
から夕方まで外回りをし
て、夜10時まで信濃の縣
社に入社した。それでも農
業という毎日、フルマ
ラソンをこなしているだけで、
やる気はあらず、やりが
いもなかった。そして
入社2年目の春、当たり
前のことに気づく。「サ
ラリーマンがいやなんじ
やない。仕事の中身が問
題なんだ」。高校を出る
ころからの心算であった
もやが、少し前れたよう
な気がした。

「農業をやっている会
社を探そう」。そんなも
のが存在することさえ知
らなかつた。でも「ネク
タイを締め、毎日同じよ
うな仕事をやる生活は、
もうおしまいたい」とい
い、仲野さんは、勤めていた
会社に辞表を出した。器
成だった。【高田利雄氏
撮影】



カモと戯れる

根をおろす

オフィスは水田 ③

10月5日、中野誠さんと交際していた菜菜美さんは、東京圏内の勤務先でパソコンに向かっていた。「野菜」「会社」のキーワードを打ち込み、インターネットの検索ページは、すぐに「森ファミリーサービス」のホームページへ飛んだ。

森ファミリーは有機栽培の米を酒造用に醸造販売し、「野菜の米屋」を目標としていた。ホームページの表紙には、苗代田に輝く稲穂が垂れる水田で、青いつなぎ姿の男たちがカマツホースをしている。「米を作りたいと言っていた彼らばかり」。菜菜美さんはすぐにホームページの掲示板に書き込んだ。「野菜栽培を学びたい」と書いている友人がいますが、米人がなく、地方に居ていますが、農協経営についてお話を聞かせていただけませんか」。中野さんにも森ファミリーのことを伝えたい。

「話を聞いてください」

なぜか自分も水田の中でカマツホースをしている感じがした。立ち止まってもいい、中野さんは森ファミリーの森田社長に「話を聞いてください」とメールを打った。

森ファミリーは1994年設立。元々家族で農業を営んでいたが、若者が入って来ず、いよいよ会社事業に委ねた。「農業を長く続けるためには、農業経営者の継業で現場を守るのと同時に、スムーズな世代交代が必要」という森田社長の思いからだ。社員の募集は正社員採用はなかったが、中野さんのメールに興味を引かれた。森田社長は前向きに応じた。「野菜を産しもうとしていて」。森田社長は、思いの外、楽な仕事に、魅力を感じた。

11月下旬、中野さんと森田社長から電話があった。「ジャガイも野菜を産んでくれる。野菜大学校を開設するつもりが潰れていました」。

サラリーマンと呼ばないで

「野菜を産んでくれる。野菜大学校を開設するつもりが潰れていました」。

しかし、新入社員を育てていたのは、想像を超える過酷な世界だった。

サラリーマンと呼ばないで

根をおろす

オフィスは水田 ⑤



夢を語る = 森田雅史写真

02年1月、仲野誠さんは就職。認められた「うれしかった」。

「経営相談」と「機械管理」の両面担当者に昇進。そして4月には、仲野さんと同じ農家出身ではない先輩が入社した。東京郊内で農業団体が開いた就職説明会に参加した約1300人の中の2人。

森ファームの社員は12人に増え、仲野さんに部下もできた。

さっそく、新人2人と会社が新しく始めたアイガモ農法に挑戦した。最初にヒナもり羽を取り寄せたが、夜間の飼育管理に失敗し、数日でヒナは死んでしまった。2度目に取り寄せたヒナは順調に育ったが、水田に放すと、雑草を食べない。失敗を繰り返しながら、やっとの思いで越冬卵を使わない有機無農薬米「あいがも君」を8月末に収穫した。

「本物の農民になりたい」

9月にその米を減産した。うちで作っているほかの米に比べ、味は落ちないで、上々の出来栄であった。年が明けると、仲野さんにはアイガモの飼育状況や圃場周辺の自然を、ホームページで訪問者に伝える仕事も増えた。

「前年12月には、森ファームとめぐり合わせてくれた奈美さんと結婚。2人の職場の中間にある埼玉縣春日部市へ引っ越した。給料は手取りで3万円前後。以前勤めた会社よりは少し多めだが、休みはちょっと足りない。農作業や講習、イベントで土日出ることも多い。でも、そんな仲野さんを、奈美さんはほうちやましく思う。」「『変わった』といって帰ってきてても、僕が生き生きしているもの」

仲野さんは、西広に冬タライで働く同世代のサラリーマンを見ても、気にならないようになっただ。「やりたい仕事は、人それぞれ違うから」

入社してよかったと思ふ。でも今でも仕事の手帳をつい忘れてしまうこともある。そのたびに、

仲野さんは「農業がまた

体に馴染み付いていない」と反

答する。「前職はかかるとる

うが、本物の農夫になりたい。

夢が完成するのはその時だ」

仲野さんは、そう思っている。

【森田健太】

＝おわり

「前年12月には、森ファームとめぐり合わせてくれた奈美さんと結婚。2人の職場の中間にある埼玉縣春日部市へ引っ越した。給料は手取りで3万円前後。以前勤めた会社よりは少し多めだが、休みはちょっと足りない。農作業や講習、イベントで土日出ることも多い。でも、そんな仲野さんを、奈美さんはほうちやましく思う。」「『変わった』といって帰ってきてても、僕が生き生きしているもの」

仲野さんは「農業がまた体に馴染み付いていない」と反答する。「前職はかかるとるうが、本物の農夫になりたい。夢が完成するのはその時だ」仲野さんは、そう思っている。

【森田健太】

＝おわり

（米田からは、さよなら東京）